

**熊毛地区  
社会教育委員だより**

平成29年2月発行  
熊毛地区社会教育  
委員連絡協議会

**第四十六回九州ブロック  
社会教育研究大会に参加して**

熊毛地区社会教育委員連絡協議会  
会長 山元 兼夫

私は、十一月十日に開催された九州ブロック社会教育研究大会（福岡大会）に参加しました。注目すべき事例発表があり、熊毛の委員にもお伝えしたいと思えます。佐賀県にある唐津市子育て支援情報センター長の「中学校子育でサロンから見えてくるもの」というテーマでした。

活動の内容は、次世代を担う子どもたちへ大切なことを伝えていくために、中学校内に子育でサロンを作り、地域の乳幼児親子が中学校に出向いて中学生と交流し、触れ合う機会を作っています。中学生が中学校子育でサロンを通して、人を産み育てること、生まれて育ててもらった日々を思い、命の大切さや家族や地域への感謝の気持ちを感じ、地域とのつながりのきっかけづくりになってほしいと支援センターは考えています。子育て中の親や地域の方は、子どもを取り巻く環境に関心をもち、地域ぐるみの積極的な支援が大きな役割を果たすことを実感し、母親自身の自信につなげてほしい、また親子の仲間づくりにも役立ててほしいと思っているとのことでした。



福岡大会の様子

た。このような事例は、私たちの地域では例がないように思われます。少子化時代の中、子育て中の親たちは、紛れもなく総合的な支援が行われることを願っています。私たち社会教育委員の果たす役割は、社会全体で子どもを育てることが肝要だと思えます。

**地域力で魅力あるPTA活動を**

中種子町PTA連絡協議会  
野平 裕樹

中種子町PTA連絡協議会は、「単Pが抱える悩みや課題を解決するための情報交換や交流の場」、「PTA役員が一堂に会し、研修・学習する場」であり、PTA活動に関する様々な情報を提供しながら、保護者と教職員が協力して、児童生徒の健全な育成を目指し、生涯学習の観点に立って、組織的・計画的・継続的な活動を展開することを基本方針としています。

しかしながら、近年、少子化・過疎化の進行により、PTA戸数も減少している状況で

あり、保護者だけのPTA活動が難しくなってきたことも事実です。そういう状況の中でも、本町の星原小学校では、校区に残る卒業生や元PTA会員の方々に準会員としてPTA活動に参加していただくことで、学校行事・PTA活動だけでなく、地域に残る年中行事や郷土芸能の伝承なども校区全体で積極的に行っていきます。また、納官小学校においては、PTA戸数八戸という厳しい状況にありながら、保護者と教職員、そして地域の方々が連携しながら子どもたちを温かく見守り、家族のようなPTAを作り上げています。その功績が認められ、昨年十一月には、日本PTA全国協議会会長賞を受賞しました。少ない人数でも、創意工夫でどこにも負けないPTA活動ができることを証明してくれました。

今後の本町PTAの課題として「役員のなり手がいない」「活動のマンネリ化」など、挙げれば枚挙に暇がありません。どこの地域でも同じような課題を抱えていると思えますが、子どもたちが郷土に誇りをもち、将来に夢と希望をもてる教育環境を、私たちPTAと関係機関が相互に理解・協力し合い、信頼関係を深めながら地域ぐるみで作っていかなくてはならないと考えます。



日本PTA全国協議会 受賞式

子どもの成長が楽しみな  
青少年育成活動

屋久島町子ども会育成連絡協議会

会長 泊 秋敏

昭和六十二年に子ども会指導者として活動を始めてから三十年が過ぎました。「もう若い人たちに任せて引退したら」と、妻によく言われますが、年齢を重ねるごとに子どもたちとの触れ合いが楽しくてやめられません。もう病気かも・・・。

先日、子どもたちの通学路の草刈りをしていると、下校時の小学三年生の男の子に「おじちゃん、きれいにしてくれて有難う」と言われ、私は「君達がいつも通る道だからね」と答えたものの、小学三年生の言葉に驚かされました。同時に、この子の親は、どんな素敵な教育をしているのだろうと思いつつ、とても良い気分になりました。

屋久島町子連では、数年前から毎年二つの単位子ども会に「子どもたちでつくる子ども会活動」という名称で、一年間をモデル子ども会として活動しています。殆どの子ども会が育成者の指導のもとで年間活動を



子ども会活動の様子

決め、育成者の指導で活動していますが、モデル子ども会では年間行事のうち少なくとも一つは、活動内容を子どもたちだけで話し合い、計画を立て、少し育成者の協力を得て子どもたちだけの力でやり遂げています。子どもたちだけでやる活動ですから、結果に不満が残ることもあるかも知れません。しかし子どもたちは、自分たちだけの力でできた満足感を得ることができると思っています。

この活動の最後は、育成者・指導者の指導のもと、活動を振り返って話し合いをすることです。良かった点や反省点を出し合い、次の活動に繋げていけるよう、子どもたちの自主活動そのものが定着してくれることが私たちのねらいです。

先般、熊毛地区ジュニア・リーダー養成研修に高校生が参加してくれましたが、それぞれのクラブが素晴らしい活動をしているように非常に嬉しく思いました。

地域を思い、地域行事にボランティアとして積極的に参加し、体験活動を通じて立派な社会人となり、いつまでも、どこにいても地域のよさを忘れないで欲しいと願っています。

社会の変化も著しく、人々の意識の多様化で人とのつながりも複雑になっています。私は、町子連会長・社会教育委員として、社会教育を支えてくれる団体・学校・地域住民の協力を得ながら、「明日を開く心豊かでたくましい人づくり」を目標にして、他の委員と共に社会教育活動を継続していきたいと思っています。



地域に学び、組織に感謝

屋久島町地域女性団体連絡協議会

会長 山崎 奈美子

私たち地域女性団体連絡協議会は、地域になくてはならない組織でありたいと願っております。また、赤十字奉仕団、結核成人病予防婦人会としても活動しています。主にがん検診啓発チラシ配布活動、赤十字研修、結核制圧のための複十字シール運動（募金活動）等を行っています。

常に地域に密着した活動を取り入れ、災害に対する対策講習も実施しています。正しい知識をもつことで正しく対応することができ、「災害は、忘れなければ防げる」を教訓に、学習することが全ての活動につながっていくものと思っています。

また、少子化対策の一環として、これまで結婚支援の「出会い応援イベント」を三回実施することができました。熊毛地区はもとより、県下・全国への情報発信、町内の独身男女への声かけ・チラシ配布、行政への協力要請、企業への参加依頼等、思いつく限りの方法を提案しているところではあります。

現在は、県より委嘱された「世話やきキューピッド」五人を中心に町女連の運営委員や会員が一丸となって打ち合わせ会を重ね、情報



出会い応援イベントの様子

交換を行い、現状把握をしています。まさしく組織あつての広がりです。

イベント当日は、会員の方々の協力でお茶・手作りお菓子等の心のこもった温かいおもてなしを精一杯させて頂きました。これまでに二組がめでたくゴールインされ、「おせっかいおばさんたち」にとつて、何よりも嬉しいことです。

この出会い応援イベントは、地域福祉活動助成金活用事業（共同募金助成金）の支援も頂いております。改めて感謝申し上げます。

このイベントに参加しなければ出会うことなかった人と運命的な出会いをして、人とのつながりや絆が深まっていくことを感じ取ることができました。

今後、常に研鑽し、学習意欲を高めて、人とのつながりや他団体との連携を深め、共生・協働の心を大切にしたいとふるさとづくりを目指して、地域に根ざした活動に取り組んでいく地域女性団体でありたいと思います。

結びに、地域並びに各組織の皆様には感謝申し上げます。

地域を照らす子どもたちから

西之表市立山地区公民館

館長 梶原 敏夫

子どもの声が学校で聞こえる、文字にすれば当たり前のことが、こんなにも地域を嬉しくするものなのかと思えました。

平成二十七年に休校となった立山小学校。地域の方々から聞かれた最初の声は、音がなくなつたということでした。定時で聞こえた



ふるさとまなび～隊



まなび隊事業を通して、大きなバトンと喜びに携われることをとてもありがたく感じました。

チャイムの音、出入りする大人の声、何より学び走り遊ぶ子どもたちの笑い声です。教育委員会社会教育課のふるさとまなび隊の道歩き体験事業で立山校区に子どもたちがやってくることで、学校に子どもの笑い声が帰ってきました。その他にもこの事業により、歴史を良く知る人にはガイド役をしていたり、昔遊びを教わったり、料理上手な婦人の皆さんには、安納芋・紫芋・里芋・黒糖を蒸したり、焼いたり、揚げたりと工夫された昔ながらのお菓子をふるまっていたりするなど、地域の人がそれぞれの特技をもう一度持ち寄ることができました。そして喜ばれたことは、とても大切な経験だと感じています。百年以上昔の人たちと同じように道を歩き、場に立つことができる立山校区。郷土の歴史を体験し、課外学習として活かし、次の世代へつなぐこと。

市民の学習意欲を大切に  
生涯学習社会の実現を目指して

西之表市教育委員会

社会教育課

主事 荒河 翼

西之表市では、年間を通じた生涯学習市民講座を開講しており、今年も、十二講座延べ約百九十人の受講生が楽しく、そして熱心に学習に取り組んでいます。新規の講座を三つ開設したことで、昨年より受講者数は、三十人の増となりました。特に毎年市民アンケートで要望が多かった新設のヨガ・ストレッチ講座は、定員二十人に対し、四十人の応募があるなどニーズの高さを実感しました。

スペイン語講座も今年初めて開設しました。私も受講者として参加しています。また「来年以降、講座を開いてみたい」と逆アプローチしてきた方との出会いもありました。いろいろな場に自ら顔を出し、人を知ることの大切さを改めて実感しています。

もちろん良いことばかりではなく、課題もあります。まず、市民講座から自主講座への移行です。先生に教えられないばかりではなく、今後は自主的に活動する学習グループを増やしていきたい、さらに学んだことを発表できる機会を設けたり、受講生を今度は講師として依頼したりす



ヨガ教室の様子

ることで人材育成にも繋げたいと考えています。  
 また、講座は市街地で行われることが多いため、自宅が遠かったり、交通手段がなかったりして受講に踏み切れない方も多いと考えられます。こういった方々のため、地域の公民館で「公民館講座」も活発に行っていると思います。

離島というハンデイを感じさせず、誰もが学びたいことを楽しく学ぶことができる生涯学習社会の実現を目指し、これからもアンテナを高く張り市民の学習意欲に応えていきたいと思っています。

**婦人会活動の役割**

南種子町社会教育委員

古市 雪枝



婦人会活動の様子

先輩方がより良き知恵と工夫を凝らし、助け合いの心で支えながら守り続けてきた婦人部組織。その組織は今、女性の社会進出が進み役員の成り手がいないという現実に直面して

私たち公民館婦人部は、現在会員数五百六十四人をもつて活動しております。戦後七十年余りのときを経て、時代はめまぐるしく変わりました。日々の生活を安心してより良く生きていくために、

います。

集いの場から情報を得て日々の生活に活かしてきた時代から、情報端末を個人で所有する時代となり、一人でも不自由や寂しさを感ずることなく生活できる、そういう方が増えてきました。本当にこれでいいのかと不安になります。

今、私たちがやらなければならないことは、家庭教育力の向上と地域力の底上げだと思います。すべての行事で、活動にやらされている感をなくし、自分たちのためにやらなければならないという意識に変わらなければなりません。そこに人材育成は欠かせない大切なことだと思っています。

世代間交流を図りながら、様々なことに関心をもち学習していきたいです。まずは無関心をなくし、関心をもつてほしいです。そして何かを感じ、言葉や行動に移し、失敗しても成し遂げた喜びを感じることで、人はリーダーになれるのではないかと考えます。

わが町南種子町（郷土）の魅力を子どもたちに伝えられるよう、単立っていった子ども達も帰ってきたくなるようなふるさとにするための努力や活動を私たちは行っていかれたらと思います。

**青年団活動について考える**

南種子町社会教育委員

河野 正彰

私が所属する南種子町連合青年団は、現在約三十人で活動しています。

地域のために多くの先輩方が奮闘した我が団も、団員数は最盛期の半分以下になっており、

かつては団単独で実施していた活動も現在では開催できないのが現状です。

また、団員の多くは役場の職員で、大きな行事の際には仕事と青年団活動との両立が非常に難しい状況です。

町民の数も年々減少しており、青年層と言われる人たちがほとんどいない中、団員数の維持や確保は困難を極めています。

地方創生が叫ばれる今、我々青年団として何ができるのか、どうしたら地域に貢献できる団体になれるのかと考える日々が続きます。今後も飛躍的な団員数の増加が見込めない中、私たちにできることを模索し、実行していくことが重要だと考えます。

平成二十七年からロケット祭りでの出店やふるさと祭りでのうどん販売に加え、サンタクロース大作戦と題し、クリスマスに町内の子どもたちへ保護者の方からお預かりしたプレゼントを配る催しを企画しました。昨年十二月に無事二回目を実施することができ、応募していた方からの笑顔や感謝の言葉を掛けていただき、やってよかったという気持ちになりました。このような気持ちこそ青年団活動の原動力ではないだろうかと思えます。少ない団員でも、様々な活動を精力的に取り組む必要性を強く感じました。今後私たちにしかできない青年団活動を展開し、本町の発展に微力ながら貢献できるように取組を進めていきます。



南種子町青年団